

蒼柴神社

蒼柴神社は2世紀半近くもの間、ほぼ原型をとどめています。第二次世界大戦中の空襲の被害を免れましたが、長岡の神社仏閣の多くは大きな被害を受けたり、破壊されたりしました。その一部は第二次世界大戦後に再建されました。

1781年に牧野家が社殿の造営を命じました。当時、一族は現在の長岡市にある長岡城を中心とした長岡藩を率いていました。蒼柴神社のデザインは、2世紀以上にわたって日本を支配した幕府の創始者である徳川家康（1543～1616）を祀った、日本を代表する神社の一つである日光東照宮をモデルにしています。

神社の奥の小道には、長岡藩主の墓石が並んでいます。1618年には牧野忠成（1581～1655）が長岡城を支配し、その後12代にわたって牧野家が統治しました。

最後の大名となった牧野忠毅（1859～1918）は、1871年に封建制度と長岡藩の廃止でその治世を終えました。彼はその後、新政府の下で地方知事を務めました。

そこから少し歩くと、戊辰戦争（1868年～1869年）と西南戦争（1877年）という2つの内戦で命を落とした人々の記念碑があります。日本の潜水艦の魚雷の薬莖が保存されており、記念碑の一部を形成しています。

現在では、多くの伝統的な風習の中で、神社は重要な役割を果たしています。おそらく最も人気なのは「七五三」かと思います。この風習は、毎年11月15日頃に、3歳、5歳、7歳の子供を連れて神社に参拝し、将来の幸せ、出世、幸福を祈願する習慣があります。神社前での結婚式は4月から10月まで行われ、年間を通しておみくじや絵馬などが用意されています。

この種の神社は、伝統的に無病息災や幸福をもたらすとされています。しかし、最近では、人々は人生の様々な問題の助けを求めて神社を訪問します。

蒼柴神社は、長岡の人々の精神的・社会的な拠り所です。喜びの時も、苦難の時も、希望と平和の象徴として、街の繁栄が続いています。

神社での参拝

誰でも参拝して祈りを捧げ、日々の努力を神々にお願いすることができます。その際には、神社に近づき、箱の中に硬貨を投げ入れてお供えをし、二礼をするのが慣例となっています。そして、手を2回叩いてから、手のひらを合わせて黙祷を捧げます。

祈りを捧げたら、一歩下がって最後のお辞儀をします。また、縁起物として、神社の鐘を鳴らす際には、神社から下に伸びる縄をそと引っ張って鳴らすのが一般的です。